# 三田文學

四月

大正十五年四月二十四日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和十七年三月二十日印刷納本　昭和十七年四月一日發行　第十七卷　第四號

# 人形物語（2）

花柳章太郎

先づその女を描くことをこれらの名人は基本としたのだ。その女を描寫する心掛は常に私もモットーとして居る。舞臺と云ふカンバスへ役者は體力でその人間をデッサンするのだ

「次いで吉田喜十郎はん、吉田金四はん有名だしたが、この人達は私が舞臺を勤める一寸前に亡くなりました。

その頃の最古老は豐松宗十郎さん吉田才治さんで人形遣ひが一同集まつた時でも一番上座に居られました。その次座に初代名人の玉造さんが控へて居たのだすよつて人形芝居がいかに盛んであつたかちゆうことが分りますやろ」

『女形遣ひの名人吉田辰造』

三代目吉田辰造とて二代目吉田辰五郎の悴で二代目辰造の門弟（或は二代目辰造の弟弟子）明治初年のをやま遣ひの第一人者と云ふことを私は調べて、その名人の藝風を榮三師に聽いてみた。

「さうでんな、わての聞いてる名人の中での女形遣ひでは先づこの人を擧げんなりまへんな…妹脊山の杉酒屋のお三輪な、今でも我々仲間で屢々噂することだすが、お三輪が酸漿を揉み〳〵歸へつて來る形の可愛らしさなぞなかつた。又壽司屋のお里のクドキの「父も聞えず母様も——」の條、暖簾を覗いてじり〳〵と後退りする振りが何とも云へずよかつたと聞いて居ります。その他八重垣姫もよかつたとの事でつまり女形ものでも振袖ものが格別やつたとの事で、廿四孝の奥庭のみだれを玉造さんと遣ははつた時、斯うした狐や變化ものの名人の玉造はんと二人八重垣を遣うて、大評判をとつた人でうんと古風な女形遣ひで後の紋十郎はんは、寫實な女形だしたが、この人の遣ひ方は時代だしたんやと云ふことだす」

人形遣ひの法は吉田がもつとも多く桐竹、しかし豐松と云ふのは珍らしいので、これも聞いて見た。

「この人は三代目宗十郎、彦元座開場當時から居てはつたこれも明治初年の古老の方だした。他に違つた名で吉川と云ふのもおます。

『明治初年の名人形遣ひのこと』

「吉田喜十郎はんも有名な方で、左遣ひの名人で聞きにゆ

きさへすれば何んでも教へて呉れた人。現在でも型となつて居る太十の操のクドキの「現在母御を手にかけ」の竹槍を持つ振りは、この方が始めて演らはつたちゆうことだす。

吉田金四はんは明治十四年に歿した方だすがこの方の荒事は實に物凄いものやつと云ひます。この方は時折、文樂へも出やはつたがその他は大體が外の芝居へ許り出てはつて居たさうで……藝に熱のあつた人で、「金四の早代り」と云つて早業が得意で「阿波十」の段切りの十郎兵衛の屋根の上の立廻りは有名なものだした、極り／＼の物凄い荒もの遣ひの名人やと先代の門造はん云ふてはりました。」

明治初年時代の人形遣の話は面白かつた。別に名人玉造の話が長く續いたが次の稿に讓ることにして、川口君は作家の立場として院本物に就て榮三、相生の兩氏に話を聞きだした。

## 『院本もの』

川口君は「私共作家として舞臺へかけて見て自分の物でも又、他人のものでも作としてよくても舞臺効果のあがらないもの、又作としては別にそれ程でないものでも舞臺に登らせて面白い物になるものがある。淨瑠璃の方でもその例が多いやうですが、貴方の方でも語りいゝもの又、遣ひいゝものがあるでせうな。例へば新作でも今度の名和長年は作として幸田先生の文章はまとまつて居るが、効果は小鍛冶の方があると云ふやうに、昔の作者のものでもさうした例が多くあるでせう……」

相生太夫は常に榮三師をたてゝ自分は多く話さず私と川口君と榮三師の話を默つて聽いて居る。榮三師は又話し續ける。

## 『文章より作曲』

「淨瑠璃は文章よりは、その節付が物を云ひますな、たとへば寺子屋は文章もよく又節付もよろしいよつて、お客はんも飽きまへんし、又遣ふてもだん／＼乘つて來ます。只今演つとります引窓など、文章はトテモよろしいのだつけど、どうも山がおまへんよつてもう一つ受けまへん。殊に段切れのあかんもんはだめだす。院本はもつとも字が細かく紙數にして百枚以上おます。

現今はなか／＼手に入りまへん。わての處にも入用なものだけでそうおまへん。

「それは我々芝居の方でも何時もそれで惱みます。幕切れのマトマラぬものは矢張り見物に受けないやうです。婦系圖と瀧の白糸を比べて見ても解ります。婦系圖の方はラストがよくないので印象が薄いが白糸の方は印象が見物に強いから白糸を演れば當ると云ふことになります。」

斯んな話をして居るうち兩方共樂屋入りの時間となつた。

この四人を引合せた仲人役の六角さんの姿が何時の間にか

見えないので、つる市の女將さんに聞いたら「店から電話でお四人さんのお話を聞いて居るうちつい今日は店の月給日で金庫の鍵を支配人に渡すのを忘れて、こゝへお持ちやしたので、店の方が皆さん歸へれんとお待ちしてると云ふ電話で失禮でおますけどお先へお暇します。よろしゆう仰言つてはりました。」といふ。

引合せのお客を忘れて四人は話し續け夢中になつてしまつたらしい。すまないことでこちらこそ失禮した譯であつた。

まだ〳〵話はほんの口を切つただけだつたので私は斯うした席よりかへつて榮三師の家へ行つた方がお話が聽きいゝと云つたら、榮三師は是非來て呉れとのこと、實は毎日巽さんに咽喉を診察して貰ひに行く往復をお宅の前を通るのですと云つたら、そんならあしたどうぞお越し下さいと云ふ。

私は今日もお訪ねしようかと思つたが、今日の此紹介が濟んでからと思つて遠慮した事を云ひ、明日からお宅を寺子屋にして通ひますと云つて、四人は土佐堀から電車に乘つた。

それから四つ橋で降りて文樂の方へ歩いてゆく榮三師の姿はどうしてまだ〳〵矍鑠たるもので、私の師匠（喜多村）は七十一歳だが樂三師は七十歳、兩方とも藝にも體にも若さは漲ぎつて居る。そしてどこ迄も藝人らしくない世辭氣のない點、そして付きが悪くて交際して飽きない點が似て居るのを賴もしく私は電車の中から秋の陽ざしを浴びて四つ橋を渡つてゆく榮三師の白い足袋の足取りを見入つて居た。

# 三田文學

## 三月號


□ふくろ（扉）……福田豐四郎
創作
長篇小說 眞珠の胎……間宮茂輔
章子（小說）……東文彥
幕開く（小說）……鈴木重雄
美しくみゆき降れる（詩）……壺田花子
亞細亞の日（詩）……江間章子
□詩壇時評……木下常太郎
水上瀧太郎の文學と實業……小泉信三
古典とその鑑賞（文藝行路）……井汲清治
文藝時評・幸福の探究と自我愛……矢崎彈
春へ（俳句）……石塚友二
北海道の旅（短歌）……巢木健
ミンドリン……濱田恒一
南方のうた……高橋廣江
報道戰について……金行勳夫
三度目の八日……一瀨直行
三田劇談會（座談會）
□「春の霜」と
□「博多小女郎浪枕」
出席者 久保田万太郎 内村直也 小山祐士 大江良太郎 和木清三郎 内田誠
初雪……花柳章太郎
人形物語……
書物搜索—雜筆五十六……横山重
新刊巡禮
篠笛（小說集）……舟橋聖一著
荒海（小說集）……中山義秀著
遠方の人（小說集）……森山啓著
裸身の道（小說集）……中井正晃著
青丹よし（小說集）……井上友一郎著
綺麗な娘（長篇小說）……牛田義之著
船路（小說集）……壺井榮著
遠い牧歌（長篇小說）……和田傳著
地に芽ぐむ（長篇小說）……荒木巍著
女の見た夢（長篇小說）……松田解子著
青雲（長篇小說）……田島準子著
南京の胡弓（小說集）……井上友一郎著
六號雜記

## 編輯後記

▽戯曲「小野寺十内」は宇野君の近作である。やがて、歌舞伎座あたりの脚光を浴びるものであらうが、漸く圓熟の境地に入つた作品である。木村君の第二作「禮拜」一瀬君の「健康」と三篇を以て創作欄を飾つた。詩は、三田の逸材、村野四郎君と小林善雄君。

▽井汲さんの「文藝行路」は三十枚、かうしたユニイクな紹介をつづけて行く筈である。矢崎君の「文藝時評」と柴田、宮尾兩君が筆陣を張つてくれた。

▽富安風生氏の俳句に配するに佐藤佐太郎氏の短歌を以てした。低唱惻々として胸を打つものがあるではないか。

▽今月の「三田劇談會」は「前進座」の河原崎長十郎と翫右衛門君との御來席を得、賑つた。

▽扉繪は、文化奉行會のメムバーで、陸軍囑託として久しく南京に滯在した原精一君が、最近歸來した收穫である。

▽水上先生の三周忌は三月二十三日に相當する。追慕の念いよいよ深いものがある。初め、三田文學會として御遺族を御招待して、何か法要を營みたい意向であつたが、時節柄御辭退があつたのでこれをとりやめ、心ばかりの追慕の催をしたり、多磨墓地へ參詣する事になつた。尙、御遺族は、本月末、麻布區本村町二三番地仙臺坂上へ御引越しになる事になつた。

▽用紙はいよいよ節約を餘儀なくされて來た。國策の線に沿つて、ページ數の減じるのを徒らに駭く事なく、この少い内に豐富な優れたものを盛る事を心がけなければならぬ。

▽三田文學出版部も小泉塾長「學生に與ふ」高橋誠一郎「王城山莊隨筆」と富田正文「福澤諭吉襍攷」を刊行する事によつて、第一期の企劃を完了したわけである。これで、われわれの出版の性格と方向とは實質的に知つてもらへたらうと思ふ。出版部に對して色々言說がなされて來たが、僕はそれについては何も言はなかつた。ただ、實行によつてそれを證明するしかないと思つたからである。その著者と內容からいつて、何れも意想外の好評と歡迎を得た。われわれの企劃の、出版の方向の妥當であつたのを私かに喜ぶものである。

▽四月の新刊として、間宮茂輔の長篇小說「眞珠の胎」「自選久保田万太郎句集」、三宅三郎著「歌舞伎劇鑑賞」を刊行する。

▽本號の校正の始まる頃から、風邪發熱し、臥床し、離床し、ぶり返し、十何年振りかで高熱に惱みつづけた。やつと、雜誌の遲々たる進行と共に病勢も衰えた。やがて、柳が青み、花が咲かうといふのに、顏がむくみ、腰の痛みに呻吟するとは何といふことであらうか。このところ、聊か健康に自信を失ひかけて來た。仕事が一段落したら、少し東京を離れて靜養したいと思つてゐる。和木清三郎


停 定價 金五拾錢 (郵稅二錢)

昭和十七年五月二十日印刷(毎月一回)
昭和十七年四月一日發行(一日發行)

東京市芝區三田慶應義塾內
編輯兼發行者 和木清三郎
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
印刷者 渡邊丑之助
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
印刷所 愛宕印刷株式會社
電話芝二八八六、四三二〇

東京市芝區三田慶應義塾內
發行所 三田文學會
振替口座東京三七五〇五
東京市神田淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

購讀料金

| | | |
|---|---|---|
| 普通號一部 | 五十錢 | 二錢 |
| 半ヶ年 | 三圓五十錢 | 稅共 |
| 一年分 | 七圓 | 稅共 |

□右購讀料金は一ヶ年四回發行する定期特輯號料金を加算いたしたものであります。
□一月、五月、八月、十一月號を定期特輯號といたします。
□尙、臨時特輯號發行の場合はその都度既納購讀料より差額を申受けます。